

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530865

研究課題名(和文) 子どもを巡る映像実践の分析と映像発達研究法の検討

研究課題名(英文) Exploring visual media practices for young children to construct visual methodology of developmental psychology

研究代表者

斉藤 こずゑ (Saito, Kozue)

國學院大學・文学部・教授

研究者番号：70146736

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：映像利用の発達心理学研究法の構築を最終目的に、発達心理学の映像実践と、他領域及び日常の各種映像実践を比較した。(1)子どもの図像・映像資料の収集と分析については社会文化歴史的相対化として、国内外の子どもの映像に関する表象分析から普遍的発達表象と個別的発達表象の下位カテゴリを抽出した。(2)子どもを巡る映像実践に関するフィールド縦断研究を行った結果、発達事象の映像メディア化の効果は、映像発達研究法の可能性に関して、単に映像民族誌学的手法の応用や、発達の映像記録といった技法面だけでなく、発達、育児環境の支援システム構築や、子どもの発達そのものへの影響という広範で重要な役割を持つことが分かった。

研究成果の概要(英文)：This study compared the everyday visual practices and also visual method in other research domain with the video method of developmental psychology for the last purpose of the construction of useful visual methodology of developmental psychology. (1) the author extracted sub categories of universal development representation and of individual development representation, by the representation analysis of iconographic images, and the films of the child in domestic and foreign visual practices for socio cultural historic comparison. (2) it was realized by the longitudinal field study about the visual practice of the child that the visual methodology of developmental psychology have an extensive, important role of influence on the construction of support systems for the child care environment and for the child development itself. It is not merely the technic such as the visual record of child development, and not the application of the visual ethnography.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：映像発達研究法 映像ナラティブ 映像実践 観察 育児ブログ 映像メディア・リテラシー 映像アーカイブズ 子どもの表象

1. 研究開始当初の背景

筆者はビデオによる観察研究法を主要技法として子どものコミュニケーション発達の研究を行ってきた。映像は現実がそうであるように多様な読解を可能にするため、映像の作者と読者は元の現実とは離れて映像の意味を語り合う。映像がこのような相対的な性質を持つにもかかわらず、分析データとしての映像を、研究者だけが意味づけ数量化して発達に関する研究成果を得る方法では、分析データとしての映像が他者と共同視聴されることはほとんどないため、研究者の解釈が現実の子どもの発達を捉える唯一のものになる。それは映像データのもつ情報を有効活用しないばかりか、発達の読解の可能性を狭める結果になる。発達研究でも映像を共同視聴し、読解の違いを含む豊かな解釈の交流から新しい発見があるはずである。このような考察を筆者はさまざまな機会に発表し論文文化してきた。「実践のための研究、研究のための実践：実践者と研究者の共同研究を可能にする媒介手段としての AV 機器」2001、「発達研究方法論としての映像化の検討」2007、「映像メディア・リテラシーにおける制作体験の機能」2008、「発達研究・教育の質的技法としての映像メディア・リテラシー」2008、「映像発達研究法の可能性：フィールドにおける洞察を観る」2009。そして平成 20 - 22 年度には映像をどう制作し利用できるかという映像メディア・リテラシーの研究に繋がった。

平成 23 - 25 に行われた本研究は、その基礎のもとに、発達と映像の相互規定関係を社会文化歴史的に検討し、今日の映像実践と発達の関係を検討しようとした。しかし映像の心理学的検討はまだ十分に行われておらず、今日多様化し氾濫する日常の映像自体についても発達心理学的検討は緒についていなかった。そこで、以下の目的に示す二点から検討を進める必要があった。

2. 研究の目的

映像の発達の意味を明確にし、映像利用の発達心理学研究法を構築することを最終目的に、発達心理学研究者の映像実践と、他領域及び日常の各種映像実践を比較し相対化した。具体的には、(1)子どもの図像・映像資料の収集と分析、(2)子どもを巡る映像実践に関するフィールド縦断研究、を行った。

(1)は社会文化歴史的相対化であり、(2)は現代の日常的映像実践と発達研究の相対化である。両資料を分析し、映像のもつ特性と人々のもつ子ども・発達・育児観との相互規定関係を検討した。この分野の古典、フィリップ・アリエス「<子供>の誕生」1960(杉山光信・杉山恵美子訳 1980)の研究は子どもの図像の持つ社会文化歴史的な一般特性を見出したが、本研究では、子どもの個別性を表現し規定する手段としての図像・映像実践の意義にも焦点を当てた。すなわち一般的発

達段階の具現化としての子どもの発達過程ではなく、特定の子どもの固有な発達過程を記録するのが、映像実践の目標なのか、言語と同じく映像実践も発達の一般的姿をなぞるのかについて検討し、映像発達研究による発達の検討課題を明確にする。

さらに映像を用いることに伴う倫理的問題は本研究の遂行過程でも関わることであるため、子どもの映像実践の倫理的ガイドラインを作成する。

3. 研究の方法

先述の目標に応じ、本研究では以下の二つの方法的アプローチをとった。初年度は各種資料収集と、フィールドワークの設定・開始、インタビュー対象者および内容の決定、探索的調査を行なった。その後、関連文献・資料の参照・考察を行い、情報の整理によって、子どもを巡る映像の現状と歴史的経緯を把握し、文化比較の可能性を検討した。また発達の個別性と普遍性に関わる映像の特性についてカテゴリ化の可能性を検討し、子ども観、発達観、育児観に作用する映像の役割を明らかにする仮説的理論を構成した。具体的には子どもの写真やビデオについての分析カテゴリを検討し、映像の特性と子ども・発達・育児観の関係を探る方法を探索した。このカテゴリは社会・文化・歴史的比較のための物差しの一つとして重要なものと位置付けた。

(1) 子どもの図像・映像資料の収集

国内外のアーカイブズ機関に赴き、閲覧、複写可能な資料をデータ化する。研究における映像利用方法が分析データとしてのみではなく研究成果としても歴史的に位置付けられている映像文化人類学の分野における子どもの図像・映像資料の閲覧を重視する。

(2) 子どもを巡る映像実践に関するフィールド研究

育児ブログの縦断観察：写真利用の育児ブログに参加している数人の母親に協力を依頼し、ブログ内容(写真と解説、読者のコメント)を分析する。(1)の資料分析の場合と同じく、子どもの写真やビデオについての分析カテゴリを検討し、映像の特性と子ども・発達・育児観との関係を探る。

育児日誌、育児漫画、育児映画、子ども対象の写真、などの分析：それぞれ専門家による現代の子どもの図像・映像資料としてひとつのジャンルを構成している。このジャンルの内容自体豊富なため、上記の育児ブログを主とし、は従的資料として比較のために用いる。育児日誌は出版されているものは少ないが、歴史的資料も探索する。日誌は言語中心であるため、映像の特性との相対化を検討する上で意義がある。

4. 研究成果

(1) 子どもの図像・映像資料の収集と分析の成果：

社会文化歴史的相対化として、国内外の子ども映像に関する表象分析から普遍的発達表象と個別的発達表象の下位カテゴリを抽出する途上で、最終年に日本の公共放送アーカイブズ(NHK)の番組の閲覧が始まり、多量の映像資料を分析することが可能になった。それまでに収集した資料により、子どもの発達表象カテゴリの性質に文化差と時代差が反映することが結果として確認できたので、それを分析カテゴリとして時代差のある番組の子どもの表象に関して分析し、成果を「映像メディアにおける発達表象の構成」(2014)にまとめた。この研究は、今後以後続する新規研究計画でより深く検討することに繋がった。

また、文化差に関して非欧米、非アジアの文化で、欧米では発達領域の研究も多い中南米において、子ども観に関する観察調査を行った。その結果、仮説として予想された伝統的子ども表象と新しい子ども表象に関しては、今後も引き続き資料を得て分析することが必要となった。

(2) 子どもを巡る映像実践に関するフィールド研究の成果：

さまざまなジャンルの資料分析の結果、現代の日常的映像実践と発達研究の相対化において、映像と言語という記述メディアが持つ発達表象への影響の重要性が改めて問題になった。そこで、発達記録と記述メディアの関係について、成果を三つの学会発表としてまとめた。

、「育児ブログにおける映像とブロガーの発達観」(2011)では、「子どもの映像化=現実の断片」ではなく、「ブログ制作過程=制作者の映像による発達ナラティブ」とみなし、映像に制作者、対象、視聴者の投射を仮定した。すなわちブログ作者の発達観の表現過程を「子どもの発達的变化の発見 作者の育児体験から発達的变化の評価(正負)事例選択とその記述(映像、言語) 公開

一般的・個別的発達の参照(読者への問いかけ、コメント期待)」と仮定した。その上で、子どもの映像メディア表現の形式と内容について分析し、作者の発達表象の固有性の反映としての発達ナラティブを明確にしようとした。具体的にはブログ作者は子どもの発達の証拠写真を日常的に携帯撮影していたが、その目的を「ブログで公開する目的

固有な子の発達の記録の目的」を担うものと見なした。さらに逆に「映像に誘導される発達観」の機構も機能し「閲覧可能な写真の存在 可視化された発達観の存在」に至ると考えた。すなわち、モノとしての写真は表象への繰り返しアクセスを可能にし、考察する余裕を与え、その結果、発達観を容易に人に伝える手段となると仮定した。他方でブログ視聴者サイドでは、映像に誘導される発達観

はコメントの言葉として表現されると考えた。そこで読者コメントの内容分析から、ブログ制作者の発達ナラティブとの相互作用の特徴を探ることができた。その際、読者の育児経験と年代を考慮し、ブログ内容の表現メディア(映像、言語)と、作者、読者の言語表現、焦点化、推論根拠などとの関係を検討し映像の役割を相対化した。結論として映像メディアは読者の経験の共有に依存せずに発達観、育児課題の理解を促進する推論を可能にする役割を果たすことが確認された。育児既経験の読者には過去や現在の自分の育児や子どもとの比較を促し、育児未経験読者には言語情報のみでは果たせない子どもの発達の理解を促した。ブログの1発達事例は多様な発達事例や発達観を相補比較すること、すなわち個から個の推論と、一般化に至る推論とを同時に可能にした。

、二つ目の成果として学会発表した「発達ナラティブにおける表象媒体と場の変容の効果」(2012)では、従来多くのメディア理論において媒体が中立的な記録手段ではなく表象ツールとして意味内容と不可分であることが指摘されているように、媒体独自の特性が発達事象の解釈に差異をもたらさしうれば、それは記録者、被記録者、閲覧者の解釈においてどのような特徴を持ち、実際に子どもの理解にどのような影響をあたえうるのかについて、具体的な発達事象の記録の分析によって検討した。映像及び言語による発達現象の記録として、A 育児ブログを中心に分析し、B 自己の幼時の写真に基づく言語報告、C 育児日誌、D 民族誌学的フィルム、を比較分析対象として検討した。共通する分析カテゴリは、ア、記録行為のもたらし場の変容(発達現象の舞台化)、イ、発達変化の時間経過と操作(発達時間の変容)、ウ、発達の質的变化(質的変容)、エ、制作者と閲覧者の相互作用の形式(発達主題の相互作用)で、結果は以下のようなようだった。

A 育児ブログ(言語/映像)：ア、育児の場が言語解説と映像媒体による記録者の表現舞台と閲覧者のコメント喚起の場に変容する。イ、ブログの時系列と発達変化の順序・速度の同一化。記録者による時間操作、閲覧者のコメントによる他の発達の時系列との比較と一般化が起こる。ウ、乳幼児期は被記録者である発達主体による操作不可のため質的变化の受動状態にある。エ、ブログを舞台に両者による相互作用が被記録者の現実の発達を参照しつつ独自の発達像を構成していた。

B 自己写真の言語報告：ア、過去映像を言語解説することによって過去の再現と現在の解釈の場に変容する。イ、過去の自己発達を映像と家族の語りで再構築し、遡及的に発達時間を再現すること、および現在からの懐古的解釈が過去から見た現在の自己と遭遇させるという、時間の双方向の操作がある。ウ、

現在の自己による過去の自己発達の再構築は現在の変化に連なる。エ、過去映像の作者と現在の言語解説者の相互作用は家族内の対話形式となる。その他の閲覧者は傍観者にすぎない。

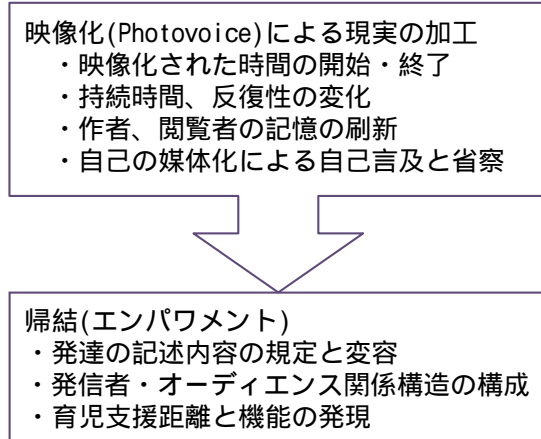
C 育児日誌(言語)：ア、育児の場が言語解説による記録者の表現舞台と家族閲覧者の解釈の場となる。イ、言語解説の順序と夫婦の記録の相互コメントが子どもの発達の時間経過を証拠立てる。ウ、発達主体による操作参加不可のため質的变化の受動状態にある。エ、日誌は家族を超えた公開によって新たな発達の考証に向けた相互作用をもたらす。

D 民族誌学的フィルム：ア、フィールドは記録者と被記録者の相互作用の場。カメラの視野が舞台効果を持つ場へ変容する。イ、映像化され編集された時系列が発達変化の順序・速度と同一化。記録者による時間操作。それに影響しうる映像化された発達主体。ウ、発達主体が映像閲覧により発達の質的变化に能動的関与可能。エ、制作者はカメラの射程で被記録者の能動的活動の場を提供。閲覧者も参加し発達像構成可能。

以上から結論として、発達の映像メディア化による発達現象の舞台効果の高さ、発達時間、質の変容度、発達を主題とした相互作用の可能性が一番高い記録行為は、民族誌学的フィルムだと考えられた。そこで映像発達研究法の構築のためには、映像民族誌学的手法を取り入れることの可能性と制約について、今後さらに検討する必要性が確認できた。

、三つ目の成果として学会発表した「発達記述メディアの構成する育児支援距離の機能」(2013)では以下の図式に基づいて育児ブログを検討した。

図1 映像化の効果



Photovoice (1997) はコミュニティ開発、公衆衛生、教育などで用いられる方法で、参加者はコミュニティや自分の観点を映像(写真、ビデオ、描画)で表現する。それについてメンバーで話し合い、ナラティブを生成し、支援などの活動を行う。主に主流社会から無視された人々に、持続可能な自己の環境の意識化、主体性、希望などを持つようエンパワ

ーする目的を持つ。育児専門の状況にある養育者は、いわば社会と隔絶しており、支援者が必要である。そこで Photovoice と育児ブログの相似性を仮定した。乳幼児子育て中の母親は、疑似的に主流社会から隔離された被抑圧的立場になぞらえらる。育児ブログや SNS 空間での活動は、育児コミュニティの主体的活動を意識化しエンパワーされることに役立つ。特に、携帯写真をともなうブログのメッセージは、閲覧者のコメントによって、育児コミュニティの相互作用をもたらし、子どもの発達や育児の意識化されたナラティブを生成する。育児支援はさまざまな距離で行われる。必ずしも直接的支援でなく間接的支援の効果が高い可能性もあると予想し、育児ブログへの閲覧者のコメントの間接的育児支援効果を検証した。

言語媒体のみである育児日誌との比較によって、育児事象の映像化とブログ空間の効果について以下の結果が得られた。

- ・映像化は単なる観察よりアクティブであり作者や閲覧者により影響を及ぼす。
- ・そのアクティブさとは映像化によって作者が現実の加工(撮影の観点、映像の選択、ブログ掲載)を行うことを指す。
- ・ブログの映像と言語的説明の閲覧者は作者の加工を経た経験を批評する。
- ・それは直接育児に手を貸す直接的支援ではなく間接的育児支援としての機能を果たす。
- ・作者はその批評に回答することで、当該育児事象に関する意識化が促進され、エンパワーされる。

・育児事象の意識化は間接的育児支援の相互作用機能の一部である。

以上の学会発表の4つの成果はさらに論文として「子どもの発達と記述メディア」(2014)にまとめた。

このような成果から、発達事象の映像メディア化のもたらす新しい効果が見出された。この効果は、映像発達研究法の可能性に関して、単に映像民族誌学的手法の応用や、発達の映像記録といった技法面だけではなく、発達、育児環境の支援システム構築や、子どもの発達そのものへの影響といった、より広範でインパクトのある役割を示唆するものと言える。今後新しい研究計画において、こういった役割についてさらに検証していく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

齋藤こずゑ、子どもの発達と記述メディア、國學院雑誌、査読有、115巻1号、2014、pp.1-17

〔学会発表〕(計 4件)

齋藤こずゑ、映像メディアにおける発達表象の構成、日本発達心理学会第25回大会、2014年3月21日、京都大学

齋藤こずゑ、発達記述メディアの構成する育児支援距離の機能、日本発達心理学会第24

回大会、2013年3月15日、明治学院大学
齋藤こずゑ、発達ナラティブにおける表象
媒体と場の変容の効果、日本発達心理学会第
23回大会、2012年3月9日、名古屋大学
齋藤こずゑ、育児ブログにおける映像とブ
ロガーの発達観、日本心理学会第75回大会、
2011年9月15日、日本大学

〔図書〕(計 1件)

齋藤こずゑ、第18章「発達研究における
倫理」、発達科学ハンドブックシリーズ2「研
究法と尺度」日本発達心理学会[編]岩立志津
夫・西野泰広[責任編集]、新曜社、2011、
総頁330(230~246)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤 こずゑ (Saito, Kozue)

國學院大學・文学部・教授

研究者番号：70146736